

天然あい色 鍵は「菌」

大量染色技術開発へ 今治の企業など

徳島県海陽町の衣料品メーカー・トータス（亀田悦子社長）や今治市南大門町4丁目の染色会社・西染工（山本敏明社長）などはこのほど、細菌の働きでアイの乾燥粉末から天然染料バイオブルーを効率的に生産し、工業的に大量染色する技術の開発に着手した。

11年度実用化目標

伝統的あい染めの色合いを保ちつつ染色工程を簡素化するのが狙い。大量生産でコストを下げ、関連製品の販路拡大につなげたいと考えて、2011年度からの実用化を目指す。

伝統的あい染めは、アイの葉を約4カ月かけて発酵させた天然染料「すくも」にアルカリを混ぜ、10日ほど再発酵させた染料液に布や糸を浸して乾かす作業を繰り返す。トータスは2000年ごろから、化学薬品を使わないあい染めの肌着を販売。08年から、量産困難な伝統手法に替わる染料と染色法を模索し始めた。

研究は経済産業省地域イノベーション創出研究開発事業に採択され、東予産業創造センター（新居浜市大生院）が事業管理。環境負荷低減に取り組む西染工や産業技術総合研究所（茨城県つくば市）などが参画している。

関係者によると、すでにバイオブルー生産にかかわる数種類の細菌が候補に挙がっており、現在は同研究所が最も安定して染色可能な菌を特定中。今後、西染工がバイオブルーを開発し、県産業技術研究所繊維産業技術センター（今治市東村南2丁目）が色合いなどを検証する。

バイオブルーの用途は、乳幼児や高齢者向け衣料品、タオル製品などを想定。亀田社長（69）は「有機栽培のアイ葉を原料にしたバイオブルー染料を広く供給し、天然アイの素晴らしさを多くの人に伝えたい」と話している。